

「アイヌ神謡集」の数について



間田 笑子

1. はじめに

何十年ぶりかの「勉強」で、少々不安なスタートを切りました。おまけに、課題が難しい！

けれど、風花さんが送ってくださったユーカラのテープを聴いて、アイヌ神謡とはどんなものか、目と耳で知ることができました。実は、私は北海道へ行ったことはありません。アイヌの文化も遠いものでした。この本を読んで知った「知里幸恵」さんのこと、金田一京助先生との交流、何もかも目新しく、また、まだ若い幸恵さんのすばらしい熱意にはただただ頭が下がるばかりでした。

読み進んでいく内に気になったのが、神謡集にでてくる多くの「数」の繰り返しでした。そこで、アイヌの数についてを調べてみようと思ったのです。

2. 「神謡集」に出てくる数の繰り返し

アイヌ神謡集を読んで、まず気づくことは規則的な数の羅列でした。その例を挙げてみましょう。

「梟の神の自ら歌った謡」から

「二十も三十も悪口を言ったり」「二十も三十も礼拝」「二日程たつと」「二日三日たつと」「二つやり三つやり」

「狐が自ら歌った謡」から

「人間が二人」「二羽のの大きな鷓」「二つの築の杭」

「兔が自ら歌った謡」(サンパヤ テレケ)から

「二つの谷、三つの谷」

「谷地の魔神が自ら歌った謡」から

「火の老女、神の老女があかい着物、六枚の着物に帯をしめ、六枚の着物を羽織って」

「小狼の神が自ら歌った謡」(ホテナオ)から

「すると川下へ六回 川上へ六回」

「海の神が自ら歌った謡」から

「長い兄様、六人の兄様、長い姉様、六人の姉様、短い兄様、六人の兄様、短い姉様、六人の姉様」「十二人の兄様、十二人の姉様」

等々と、枚挙にいとまがない程の数の繰り返しがあらわれます。この数を、仔細にみてみると、規則的な数のあらわれ方をしているのに気がきます。すなわち、二・三・六という三つの数字です。この数をアイヌ民族では聖なる数、すなわち「聖数」としていたらしいのですが、その根拠ははっきりしません。

ここでアイヌの数について調べてみました。

3. アイヌの数の認識について

アイヌの数の数え方は、二十進法であることは知られています。その成り立ちについて調べてみました。(学者によって、アイヌ語音のローマ字表記に違いがあります)

二十進法が、手・足の指を数えることで始まったのは世界共通でしょう。アイヌの数詞も、数5は、asik = 手 aske、数10は、wan = u - an 両方 aru、数20は、hot = 一揃い、手足の指全部という意味から来ています。

そして、6から9までが10引く という形をとっているのは、1から5までの数(片手の指)がまず作られた後、10(両方の指)ができ、6から9はその後からできた数ということでしょう。つまり6から9までは減数法によっているのです。

アイヌの驚くべき厳密な二十進法は、これから先の数にあらわれます。表を見てみましょう。

数え方	その連体形	なりたち
1 sinep	sine (シネ)	
2 tup	tu (ツ)	
3 rep	re (レ)	
4 inep	ine (イネ)	inne 多くの
5 asik	asikne (アシクネ)	
6 iwan	iwan	ine 4; wan 10 = 10 - 4
7 arwan	arwan	ar ~ re 3; wan 10 = 10 - 3
8 tupes	tupesan	tup 2; san ない= 2 つない=8
9 sinepes	sinepesan	sinep 1; san ない= 1 つない= 9
10 to	wan (ワン)	
11 sinep ikasma wanpe	sinep ikasma wan	= 1 + 10
16	ine4; tu - hotne 4 - (2 × 10) ?
20 hot	hotne (ホツ)	

(表1)

30 wan-e-tu-hotne	10 で $2 \times 20 = 2 \times 20 - 10$ (あと 10 で 40 になる)
31 sinep-ikasma-wan-e-tu-hotne	$1 + (2 \times 20 - 10)$
40 tu-hotne	2×20
50 wan-e-re-hotne	$3 \times 20 - 10$
60 re-hotne	3×20
70 wan-e-ine-hotne	$4 \times 20 - 10$
80 ine-hotne	4×20
90 wan-e-asikne-hotne	$5 \times 20 - 10$
100 asikne-hotne	5×20
130 wan-e-arwan-hotne	$7 \times 20 - 10$
300 asikne-hotne-ikasma-sine-wano-hotne	$5 \cdot 20 + 1 \cdot 10 \cdot 20$ $= (5 \times 20) + 1 \times (10 \times 20)$
600 re-sine-wano-hotne	$3 \cdot 1 \cdot 10 \cdot 20$ $= 3 \times \{ 1 \times (10 \times 20) \}$

(表 2)

この表から分かる事は、20の倍数が多すぎたので、10を引くという発想でしょう。ちなみに、指を折る数え方ですが、人が数を数えるようになったとき、最初に考えたことは、手の指を動かすことであつたでしょう。片手の五本の指から五進法、両手で十進法、それに両足指が加わって二十進法が生まれたと想像しても間違い無いと思います。

日本の古代数詞を調べてみると、私たちの祖先は、片手を閉じた状態から、親指、人差し指、中指を順に起こして数え、5で五指を開いた五進法を使っていたようです。

この数え方は、今日の私たちが開いた指から始める方式と逆です。韓国語・満州語(5 = 閉じる; 6 ~ 10 = 開く)や、アイヌでも、私たちの今の方式が見られるということです。

4. 聖数について

アイヌの「聖数」は、「2」と「3」それに「6」であるらしいと書きましたが、その成立根拠は明らかではありません。そこで、ここでは、アイヌの聖数ではなく、日本語の「聖数」がどのように生まれたのか「陰陽五行と日本の文化」から引用し、陰陽五行説に従って聖数を考えていきたいと思ひます。

陰陽五行の思想では、土気には生殺の両義があり、この土気的作用、つまり「土用」

によって一つの季節は終わり、新たな季節が始まるのです。このような陰陽、あるいは五行の循環がその時宜を得て、順当ならば豊作は疑いなく、民衆の生活、国家の安泰にもつながるといえるようになっていきます。

このように見ていけば、この法則は当然神靈化され、パワーアップされることによって、一層活発に働くことでしょう。たとえば、「木・火・土・金・水」の中の「火」は、「日神」とも「火神」ともなり、「水」は、豊作の祈願の「水神」となるのです。そこに数が結びついたのが「五行」なんですね。数は10まででありますから、10を半分に分けて、次のように対応づけます。

1～6 2～7 3～8 4～9 5～10

この5種の結びつきこそが「五行」なのです。重要なことは、ここに見られる各「気」の生成の順位が、そのまま各「気」の数となっている点なんです。

1...水 2...火 3...木 4...金 5...土

ということで、水の数は1、火の数は2、木の数は3、金の数は4、土の数は5となり、この1,2,3,4,5の各数には、6,7,8,9,10が対応しますから、これらの数も同じ配当のはずで、次のようになります。

1,6...水 2,7...火 3,8...木 4,9...金 5,10...土

そして、これらの気のなかで「生殺」の気は、稲作を経済の基盤とする日本にとって極めて重要なものだったのです。

「生殺」の気とは、次のようにあらわされます。

木気...万物発生...生氣...春分を含む旧二月

金気.....凋落...殺気...秋分を含む旧八月

従って、「木気の数3と8」、「金気の数4と9」となると、聖数は「3,8」で、忌数は「4,9」です。忌数「13」は4と9の和であり、忌数「49」も金気の数から出ています。

以上、簡単に陰陽五行説について述べてきましたが、これはあくまでも稲作を中心とした、いわゆる日本人の考え方であって、狩猟と自然に生きてきたアイヌ民族に通じるものではないかもしれません。

いずれにせよ、神謡（カムイユカル）は口承によってのみ伝えられたものなので、文献を見付けることが難しく、「聖数」についての考察は「よく分らなかった」というのが私の正直な結論です。

5. おわりに

今回、今まで余り知らなかったアイヌ文化について、いろいろなことを知ることができました。（殆ど参考文献の丸写しでお恥ずかしいかぎりですが）

新しい楽しみを頂いて、お二人には大変感謝しています。これからもどうぞよろしく。

参考文献

- | | | | | |
|--------------------|-------|----|------|------|
| 1. アイヌ神謡集 | 知里 幸恵 | 編訳 | 岩波書店 | 2002 |
| 2. 数の民族誌 世界の数・日本の数 | 内林 政夫 | 著 | 八坂書房 | 1999 |
| 3. 陰陽五行と日本の文化 | 吉野 裕子 | 著 | 大和書房 | 2003 |